

日本語における「タ」形表現の多様性とその変動

岩崎憲一 久野雅樹

電気通信大学 情報理工学研究所 総合情報学専攻

1. はじめに

日本語の助動詞「タ」は基本的に過去の表現に用いられるが、近年、それとは異なる表現が見られるようになった。その顕著な例として、ファストフード店や衣料店などのサービス業での接客表現「ご注文は以上でよろしかったですか」のような用法がある。こうした使い方に対して、なぜ現在の現象を言うのに、過去形を用いるのか、といった批判は多い。一方で、こうした表現を、時代的な変化を背景とする適切な表現だとする意見もある。

本研究では、実際の使用状況を調査することで、「タ」形表現の近年の動向について検討したい。過去において多様だった過去の表現（藤井, 2010）をほぼ一身に担うことになった「タ」は、今日、過去時制を表現するにとどまらず、多様な意味をもつようになってきている。本研究では、そうした状況の一端について分析・考察を加える。

2. 関連研究

塩田(2002)は、近年用い始められた「よろしかったですか」などの特異な使い方を「いきなり用法」と命名している。彼は、この「いきなり用法」に関して、NHK 放送文化研究所が行ったことばのゆれ全国調査に基づいて、「発生」と「流行」の2つの要因について考察している。

塩田は、発生要因の有力候補として方言起源説を挙げ、その理由に、北海道・東北地方で方言として「タ」形のていねい表現が用いられていることを示している。さらに、「いきなり用法」の「よろしかったですか」の使用は、①若い世代ほど高い傾向が見られたこと、②男女差がなかったことなどから、地理的流動性が高まった現代において、地方から都市部に流出した可能性が高いと述べている。

流行要因としては、①店側本位の発想の可能

性と、②敬意を見せる発想を挙げているが、どちらにしても両者とも経営者の指導が影響していると指摘している。昔はなかった現代の大規模なチェーン展開の業種では、従業員は玉石混交であり「常に確認せよ」という雰囲気・指導のもとで「よろしかったですか」という表現が広まったのではないかとまとめている。

3 研究1. 店舗における「タ」形表現の使用状況

方法

塩田(2002)の「いきなり用法」の実態を把握するため、2009年の10～12月にかけて東京都・神奈川県のレストラン・小売業・サービス業を対象として接客時に用いられる言語表現を観察した(表1)。

表 1. 調査対象とした業種別の店舗数と人数

業種	店舗数	人数
衣料品	13	17
その他小売	10	25
その他飲食店	9	13
コンビニエンスストア	7	12
ファミリーレストラン	5	10
居酒屋	5	8
ファーストフード	3	4
サービス	1	1
合計	53	90

調査対象者（接客表現を使用した店員）の属性（年代・性別・業務形態）と接客を受けた客の属性（調査人数・年代・性別）も同時に調べた。

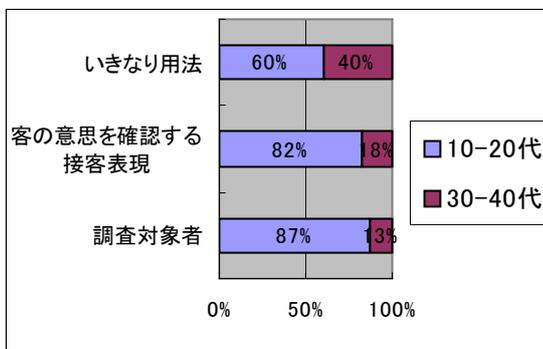
調べたデータをもとに、年代と性別について

の「タ」形表現の使用状況を比較した。

結果と考察

調査対象者の世代比と「客の意思や所有を確認する接客表現」の世代比に大きな差はない。接客の際、客に対して行う確認は、どの世代でも同じくらい言えるだろう。接客表現における「いきなり用法」の使用率は、調査対象者の世代構成を考慮すると、若い世代の方が使用は少ない。「ことばのゆれ全国調査」で、いきなり用法の「よろしかったでしょうか」の使用率と認識率の両者が、世代が若いほど高いとする結果と、違ったパターンとなった(図1)。

図 1. 接客表現の世代ごとの割合



今回の調査で、異なる結果が出た原因の1つとしてとして、時間の経過が考えられる。観察時期は塩田(2002)の調査から7年経過した2009年であり、ことば流動性によりより幅広い世代に用いられるようになったと考えられる。

「いきなり用法」に対して、雇用者・被雇用者の中で意識の差はあるのだろうか。今回、アルバイト経験のある学生10名と、「いきなり用法」が確認できた一部の店舗の雇用者・被雇用者、4名に対してインタビューを行った。

学生へのインタビューの結果として、「いきなり用法」に対して肯定的・否定的などちらの立場の人も、使用者は「自然と使っていた」「無意識に言っていた」という回答であった。また、「よろしかったでしょうか」という表現のイメージとしては「ていねいだ」という意見のほか「リズムが良い」などが挙げられた。

雇用者と被雇用者へのインタビューの結果としては、両者ともに客に伝わるのが第一であり、現時点で客からのクレームは無いので店と

しで取り締まっははいないということだった。

今回インタビューを行った店舗の被雇用者であるエリアマネージャーは東北エリアから関東エリアを担当しており、地域性についても質問をしたところ、塩田(2002)の方言起源説のような「いきなり用法」の地域性は確認できなかった。塩田も言うように、方言起源説は「いきなり用法」の発生要因になりえても流行要因にはなりえないと考えられる。

4 研究2. 新聞における「タ」形表現の使用動向

研究2-1 朝日新聞の電子アーカイブを用いて

方法

朝日新聞の電子アーカイブである「聞蔵」を用いて、1985~2009年までの記事(朝刊・本文・本紙・東京版)を対象として文末に出現する「た。」の使用記事数を調べた。

なお、「聞蔵」は年次別の記事収録数に大きなばらつきがある。そのため、「大」「思」「生」「出」など使用頻度の高いと思われる漢字10種類を検索し、その検索ヒット数で相対化を行った。具体的には、下式のように「た。」の記事使用比を求めた。

$$\text{「た。」使用比} = \frac{\text{「た。」のヒット数}}{\text{各漢字ヒット数の合計}}$$

結果と考察

朝日新聞における「た。」「した。」「あった。」など助動詞「た」を用いたと思われる文字列の検索ヒット率は時系列的に増加傾向にあった(図2)。

図 2. 朝日新聞[朝刊・本文・本紙・東京版]における「した。」の使用比

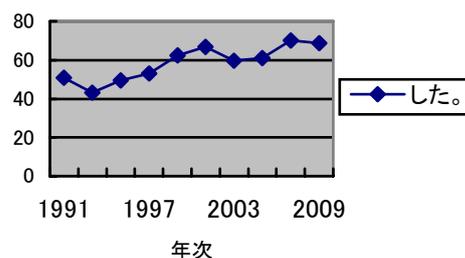


表 2. 助動詞「た」の直前に出現した主な品詞 (%)

	1995	1997	1999	2001	2003	2005	2007
する 動詞-自立	27.2	27.6	28.5	31.1	29.8	27.4	28.8
いる 動詞-非自立	8.7	7.1	7.2	7.6	7.4	7.9	7.7
れる 動詞-接尾	9.2	7.6	8.6	7.4	8.2	7.1	7.5
なる 動詞-自立	4.7	5.2	4.5	4.3	4.6	4.1	4.6
だ 助動詞	3.8	4.1	4.9	4.0	3.8	4.8	4.1

研究 2-2 毎日新聞コーパスを用いて

方法

研究 2-1 の結果を踏まえ、毎日新聞コーパス (1995 年～2007 年の奇数年分) を対象として助動詞「た」の使用動向を調査した。

① 助動詞「た」の使用率

記事データのサンプリングを行い、「茶釜」を用いてテキストの形態素解析を行った。解析したテキストをもとに総単語数、総文数、総助動詞中の、それぞれに対する助動詞「た」の使用率を求めた。

② 助動詞「た」の共起語

KWIC を用いて助動詞「た」を中心語としたときの前後相対位置に存在する語の頻度リストを作成した。このデータをもとに助動詞「た」と強く共起する語の時系列的变化を調査した。

③ 助動詞「た」の類語の使用動向

文脈で助動詞「た」の類語と思われる語 (ある、なる、ます、です、だ等) の総単語数、総文数、総助動詞中のそれぞれにおける使用率を求め、助動詞「た」の使用率と比較した。

④ 記事の文長変化と文中助動詞の割合

記事の文長を時系列的に比較した。その結果を受けて文章中の助動詞の使用率を調査した。

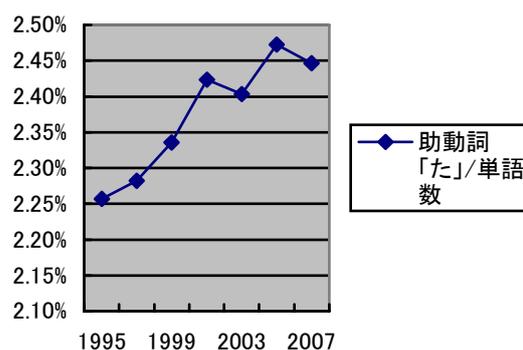
結果と考察

① 助動詞「た」の使用率

毎日新聞の 1 面記事において総単語中の助動詞「た」の使用率は増加傾向にあった (図 3)。一方で、総文数中の助動詞「た」は時系列的に大きな変動は見られなかった。また、全助動詞中の各助動詞の使用割合を調べたところ、助動詞「た」の割合は全年を通して 54% 前後であり、次いで「だ」が 23% 前後と大きな割合を占めた。

助動詞「た」のシェアが大きく、なおかつ使用割合が変化していないという結果を受けて、助動詞「た」の一意的に増加したという判断は困難な結果となった。

図 3. 総単語数における助動詞「た」の使用率



② 助動詞「た」の共起語

中心語「た」の前後で共起した語 (N=±2) の中で、特に共起関係が強かった語では、はっきりとした時系列的变化は見られなかった (表 2)。

③ 助動詞「た」の類語の使用動向

「ある」(動詞-自立) や「なる」(動詞-自立) などの動詞の総単語数中での使用率に増減傾向はなかった。

一方で、助動詞は「だ」、「ない」などのように増減を繰り返すものと「ある」のように減少傾向にあるものに分かれた。助動詞「た」が増加する一方で助動詞「ある」が減少することは、時制的に過去表現を使用する機会が増加した可能性がある。また、これまで「た」を用いなかった場面で「た」を使用するケースが出てきた可能性も想定される。

④記事の文長調査

総字数に対する単語数は減少傾向にあり、年々、文の平均的な長さは短くなっている(図4)。毎日新聞は過去15年で複数回レイアウト変更行っており、それにもとない文長が短くなったことが一因として考えられる。文が短くなれば助動詞の相対的な出現率が増え、結果的に文章中の助動詞「た」の割合を高める可能性がある。実際に、総単語中における助動詞の使用率を調べたところ、その使用率は年々増加していることがわかった(図5)。

図4. 1文あたりの単語数

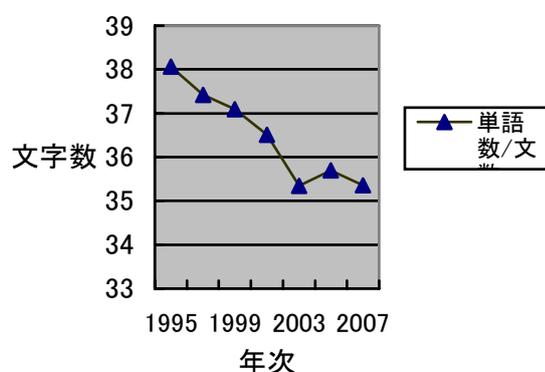
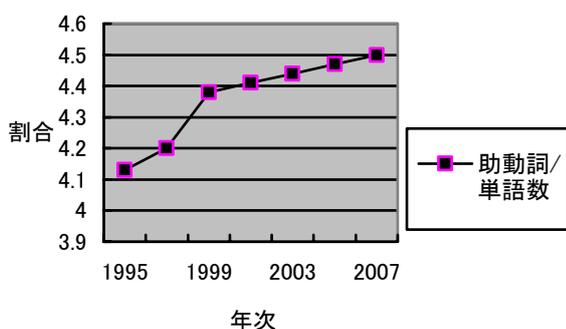


図5. 総単語数に対する総助動詞数(%)



5 全体的考察

研究1で、「タ」形のていねい表現が、「とりわけ若い世代に多く使われている」ということはなかった。また、「タ」形を無意識の内にていねいな意味合いとして使用している傾向が高かった。接客業は従業員の入れ替わりが著しい業種であり、従業員が口にする接客表現は店から店へと流れやすい。ことばの流動性が、「タ」形のていねい表現を流行させる役割を果たした

ことが示唆される。これらの変化をより精細に把握するために、地域性の把握は重要課題と考える。塩田(2002)も言うように、日本語は地域性が高く、方言のように地域によって言語表現も大きく異なる。言語表現の地域差を考慮することは、「タ」形表現の変化を検討する際に不可欠であると考えられる。

研究2では、「タ」形の使用動向調査において、新聞記事では時系列的に助動詞「た」の文章内での使用率が高まっていることが示された。今回の調査では、助動詞「た」の主要共起語で時系列変化は見られず、助動詞「た」の意味的な変化を把握することはできなかった。だが、助動詞「た」の使用程度が高まっている結果から、助動詞「た」の用法にも変化が起きている可能性がある。また、近年の新聞記事の傾向として、文長が短くなる傾向が見られ、結果的に「た」を含む助動詞全体の量が増えたことがわかった。新聞以外の文書においても、こうした変化が生じていることが想定されるため、対象を広げて経時的に調査する必要がある。なお、新聞の文章には新聞特有の表現も多く、そうした言葉の使用が助動詞「た」の用い方と様々に関連している可能性も考えられる。この見地からも、新聞以外の文書における助動詞「た」の用い方の動向を視野に置いて、検討を進める必要がある。

6 使用ツール

茶笥(chasen-2.4.2)

南瓜(cabocha-0.53)

Chaki.NET(1.4 Revision 316)

7 主要参考文献

藤井貞和 2010 日本語と時間—〈時の文法〉をたどる— 岩波書店

北原保雄 2004 問題な日本語 大修館書店

塩田雄大 2002 「よろしかったでしょうか」はよろしくないか〜平成13年度(後半)ことばのゆれ全国調査から(1)〜(放送研究と調査) 52(3) 日本放送出版協会

柳父章 2004 近代日本語の思想—翻訳文体成立事情— 法政大学出版局

毎日新聞社(1995-2007). CD-毎日新聞 日外アソシエーツ